

13	学校名 武蔵村山市立第八小学校	26～29
----	-----------------	-------

## 平成29年度研究開発自己評価書

### I 研究開発の内容

#### 1 教育課程

##### (1) 編成した教育課程の特徴

- ① 全学年において、道徳の時間を「徳育科」として再編し、各学年で、年間45単位時間実施した。
- ② 「徳育科」の内容については、「ア 道徳の時間の指導に関する内容」「イ 礼儀作法の実践的指導に関する内容（礼法の時間）」として構成し、「徳育科」の年間指導計画に反映させた。
- ③ 「徳育科」では、全学年において、上記アについては30単位時間程度を、イについては15時間程度を充てた上で、これまでの道徳年間指導計画を基に「徳育科年間指導計画」を作成・修正した。
- ④ 「徳育科」の指導を通して、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「知識・理解・技能」等、評価の観点及び評価の視点の設定の在り方や、指導と評価の一体化についての研究開発を推進した。

##### (2) 教育課程の内容は適切であったか。

以下の理由により、教育課程の内容は適切であった。

- ① 平成26年度及び27年度に実施した「礼法の時間」15項目の内容を精選し、平成28年度及び29年度は、それらを10項目に再編成した。また、学年間の系統性を踏まえた教材を学年ごとに整理し、各学年の項目ごとの略案を作成し、徳育科年間指導計画に基づいて実施した。

##### 【礼法10項目】

- ① 気持ちのよい挨拶と基本姿勢
- ② 心と身なりと物を整える態度
- ③ 先人の生き方に学ぶ姿勢
- ④ 時と場や目的に応じた言葉遣いや態度
- ⑤ いじめを絶対に許さない態度
- ⑥ 温かい人間関係をつくる姿勢
- ⑦ 規則の尊重と公共の場の使い方
- ⑧ 公共の場での心配り
- ⑨ よりよい家庭生活をつくる態度
- ⑩ よりよい学校生活をつくる態度

##### 《「礼法」の定義》

礼法とは、単なる礼儀・作法に留まらず、「自分も他人も大切にしながら、よりよい生活、よりよい社会をつくっていく心掛けや心遣い」（本校定義）

- ② 平成28年度及び29年度は、「礼法の時間」はもとより、徳育科全体の内容を4つの視点と7つの要素で構成し、道徳科との関連を明確にした。

視点	資質・能力の要素	道徳科の内容	礼法の時間の内容
自尊自律	徳育1 自身を制する力	善悪の判断、自律、自由と責任	①気持ちの良い挨拶と基本姿勢 ②心と身なりと物を整える態度
		正直、誠実	
		節度、節制	
	徳育2 自身を高める力	個性の伸長	③先人の生き方に学ぶ姿勢
		希望と勇気、努力と強い意志	
		真理の探究	
共生協働	徳育3 礼儀作法を重んじる心	礼儀	④時と場や目的に応じた言葉遣いや態度
		感謝	
	徳育4 いじめを許さず 他人を思いやる心	親切、思いやり	⑤いじめを許さない態度
		友情、信頼	⑥温かい人間関係をつくる姿勢
		相互理解、寛容	
社会創造	徳育5 社会の一員としての 自覚	規則の尊重	⑦規則の尊重と公共の場の使い方
		公正、公平、社会正義	⑧公共の場での心配り
		勤労、公共の精神	
	徳育6 社会に主体的に 参画する態度	家族愛、家庭生活の充実	⑨よりよい家庭生活をつくる態度
		よりよい学校生活、集団生活の 充実	⑩よりよい学校生活をつくる態度
		伝統と文化の尊重	
		国や郷土を愛する態度	
		国際理解、国際親善	
生命尊重	徳育7 生命を尊重する態度	生命の尊さ	
		自然愛護	
		感動、畏敬の念	
		よりよく生きる喜び	

③ 道徳的実践につなげる指導の工夫によって、各教科、外国語活動、特別活動及び総合的な学習の時間等との関連による効果がより明確になった。

- 道徳の時間との関連（主として他の人との関わりに関すること）
- 人権教育で（相手を大切に作る心、尊重する態度）
- キャリア教育で（働くことの意義、役に立つ人の振る舞い方）
- 特別活動で（異学年との関わり、儀式的行事の意味指導など）
- 国語科での敬語や言葉遣いの指導との関連
- クラブ活動での高校生や外部指導員との関わり（挨拶、振る舞い方）
- 交通安全指導員や教育ボランティアとの関わり
- 補習学習での学習支援でお世話になった人や保護者との関わり

### (3) 授業時間等についての工夫

#### ① 道徳専任教諭と学級担任の連携の工夫

- 道徳専任教諭が、各学級担任と連携し、「徳育科」の授業を行ったり、学級担任が行う授業の内容や指導方法について指導をしたりしてきた。
- 道徳専任教諭と研究主任を中心に、研究開発の内容についての方向性を検討し、研究内容を日常の「徳育科」の授業に反映させてきた。

## 2 指導方法・教材等

### (1) 実施した指導方法等の特徴

#### ① 指導方法の特徴

- 「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「知識・理解・技能」の3観点を評価の観点とし、ねらいを達成するための指導方法を実践した。  
【例】「関心・意欲・態度」をねらいとした自我関与が中心の学習  
「思考・判断・表現」をねらいとした問題解決的な学習  
「知識・理解・技能」をねらいとした体験的な学習
- 授業のねらいや児童の発達段階を踏まえて、①問題解決的な学習や動作化 ②役割演技等の体験活動を取り入れた指導 ③対話や討論など言語活動を重視した指導 ④道徳的行動や習慣に関する指導 等の指導方法を実践した。
- 1単位時間の授業展開の中に「展開1（読み物教材を中心に考える）」に加え、「展開2（実践につなげる）」を設定することにより、他教科・領域等や日常生活との関連をより明確にした。
- 評価の観点ごとに評価の視点を設定し、児童の考えの変容や深まりを見取り、発問や話し合い活動、ワークシートなどを振り返って授業改善を図ってきた。
- 1つの内容項目について数時間の授業を行うユニット化を図り、単元として設定し各時間の評価の観点やねらいを明確にして、実践した。

#### ② 教材等の工夫

- 読み物教材だけではなく、紙芝居、映像や写真等を活用したり、読み物教材の場面をペープサートで演じたり、実物を提示したりすることにより、児童の関心や意欲を高められるようにした。

#### ③ 授業の形態等の特徴

- 話し合い活動は、ペアやグループ、ランダム、全体など、ねらいや実態に応じて設定した。
- 意見交流の場では、ネームプレートやホワイトボード、模造紙等を活用して、視覚的に児童の考えが分かりやすいように工夫した。

### (2) 指導方法等は適切であったか

- 「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「知識・理解・技能」の3観点を評価の観点とし、ねらいに即した指導方法を工夫したことで、毎時間の授業のねらいが明確になってきた。
- 授業のねらいや児童の発達段階を踏まえて、①問題解決的な学習や動作化 ②役割演技などの体験活動を取り入れた指導 ③対話や討論など言語活動を重視した指導 ④道徳的行動や習慣に関する指導 等の指導方法を工夫したことにより、道徳的価値の自覚が深まり、道徳的判断力や実践意欲を高めることに結び付いた。
- 1単位時間の授業展開に「展開1」「展開2」を設定し、他教科・領域等や日常生活との関連がより明確になってきた。
- 評価の観点や評価の視点を設定したことで、児童の考えの変容や深まりを見取ったり、授業改善を図ったりすることができた。
- 1つの内容項目について2時間の授業を行うユニット化を図り、単元として設定し各時間の評価の観点やねらいを明確にしたことで、児童に身に付けさせたい力が明確になってきた。

## II 実施の効果

### 【道徳教育についての意識調査】

《対象》児童、教員、保護者

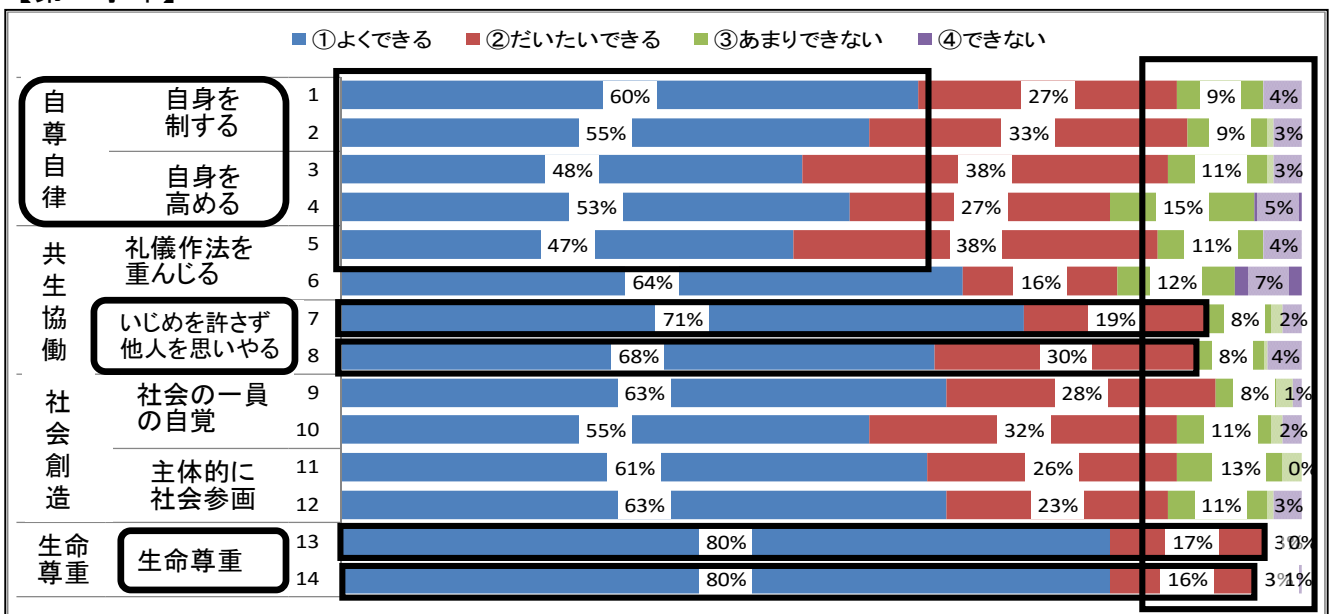
《調査項目》

自尊自律：1. 挨拶	2. 整理整頓	3. 自分の良さ	4. 努力
共生協働：5. 敬語	6. 礼儀	7. いじめを許さない	8. 温かい人間関係
社会創造：9. ルール	10. マナー	11. 家庭生活	12. 学校生活
生命尊重：13. 生命尊重	14. 自然愛護		

### 1 児童への効果

意識調査結果（平成29年9月実施、課題分析） 調査人数 715名

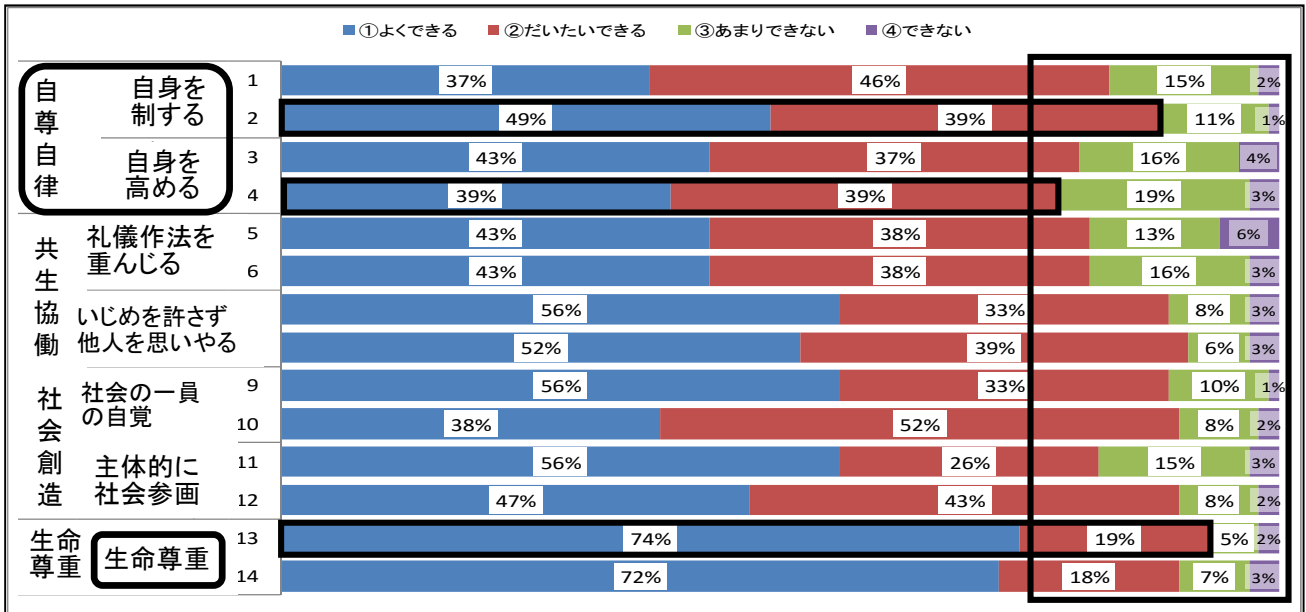
#### 【第1学年】



《効果・成果》 ◇いずれの項目も、「よくできる」「だいたいできる」（以下、「よくできる」「だいたいできる」を合わせて「肯定的回答」と表す。）と答えた児童を合わせた割合が90%前後と、高い数値を示している。◇視点「生命尊重」…「13. 生命尊重」「14. 自然愛護」⇒児童の「肯定的回答」の割合が100%に近い。このことから、命の大切さについては幼い頃から教えられてきていて、生命尊重の基盤となっていると解釈する。◇視点「共生協働」…「7. いじめを許さない」「8. 温かい人間関係」⇒視点「生命尊重」の次に高い数値を示している。この高い意識が、人権を尊重する基本となっていく。

《課題・要指導》◆全体の傾向⇒毎年、低学年（特に第1学年）の意識調査は、中・高学年に比べ、どの項目も比較的肯定的回答を示す数値が高く、実態と自己評価に大きな差が見られる。また、保護者や教員から見た第1学年の実態と比較しても各項目の数値が高い。これは、発達段階として自分を客観視する力が未熟で、過大な自己評価をしがちであると考えられる。◆視点「自尊自律」…「1. 挨拶」「2. 整理整頓」「3. 自分の良さ」「4. 努力」⇒「よくできる」と答えた児童が50%前後であることから、視点「自尊自律」の内容を重点的に指導していく必要がある。

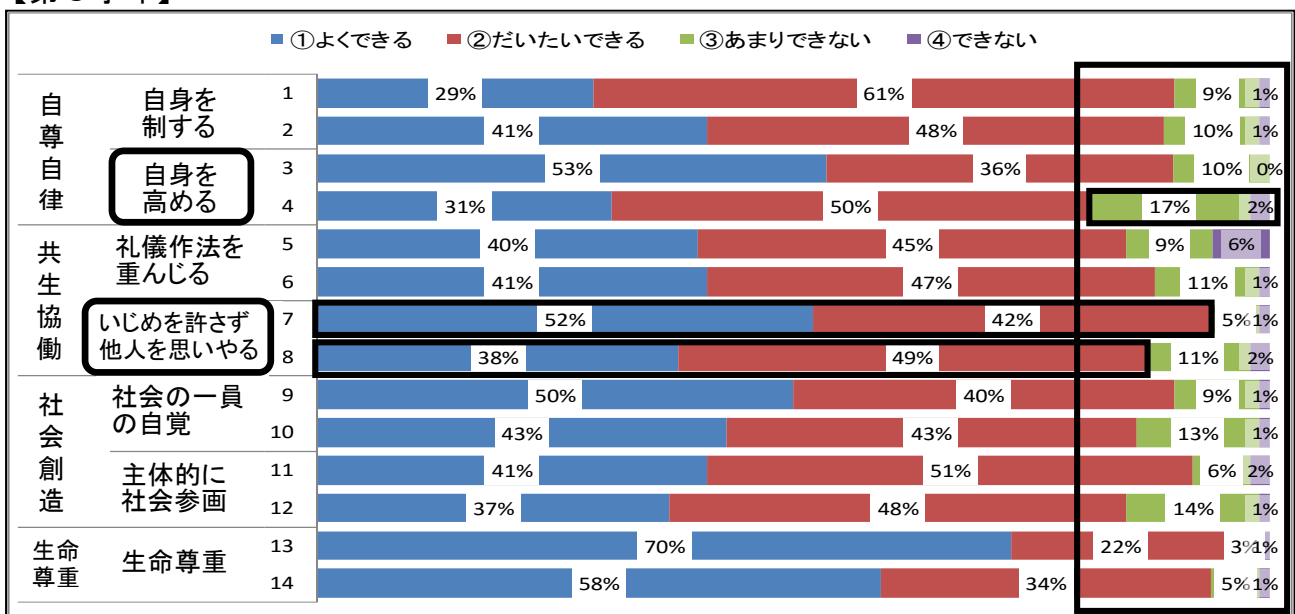
## 【第2学年】



《効果・成果》 ◇全体的に高い意識を保っている。特に、「13. 生命の尊重」において肯定的回答の割合が、93%と最も高い。徳育科の「生命尊重（ハムスターの赤ちゃん）」と生活科の単元「めざせ生きものはかせ」との学習時期を合わせ、生命・生き物で関連させたことによる結果と見る。 ◇「2. 整理整頓」⇒肯定的回答の割合が高い（今年度＝昨年度87%＋1P）。本研究における低学年の目指す児童像「自尊自律」を重点化した指導の成果があった。（P＝ポイント）

《課題・要指導》 ◆昨年度と比較すると、どの項目も若干低くなっている。特に、「4. 努力」の項目が、昨年度と比べて肯定的回答の割合が低くなっている（今年度＝昨年度92%－14P）。これは、児童自身の自分はどうでありたいという願いが高くなる一方で、学習に難しさを感じ、諦めることも多くなってきたのではないかと考える。引き続き、徳育科の「自尊自律」の視点を中心に、目標に向かって努力を続けることの良さを実感させる指導の工夫をしていく。

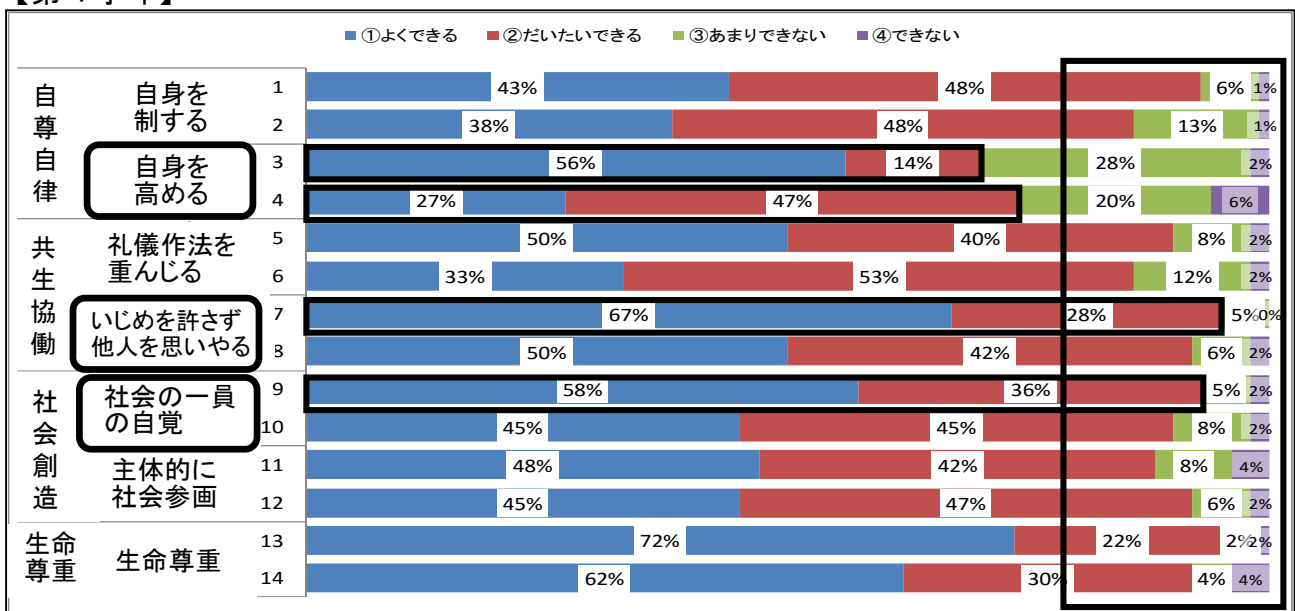
## 【第3学年】



《効果・成果》 ◇低学年と比べて、肯定的回答の割合はどの項目も概ね90%と高い意識を表している。 ◇「7. いじめを許さない」⇒昨年度と比べて、肯定的回答の割合が高い（今年度＝昨年度85%＋5P）。本研究における中学年の目指す児童像「共生協働」の視点を重点化した指導の成果があった。

《課題・要指導》 ◆「8. 温かい人間関係」⇒昨年度と比べて、肯定的回答の割合が低くなっている。これは、友達との関わりを大切にしながら良好な人間関係を形成しようとしている反面、「相手の立場になって考える」ことが難しいと思い始めていると捉える。「共生協働」の視点を重点化した指導を継続していく。 ◆「4. 努力」⇒「あまりできない」「できない」と答えた児童の割合が19%と高い。これは、昨年度と比べても否定的に答えた児童の割合が高い（今年度＝昨年度14%＋4P）。学校生活全体を通して具体的な目標を立てて努力することによる成果を実感できるようにすることが、今後の課題である。

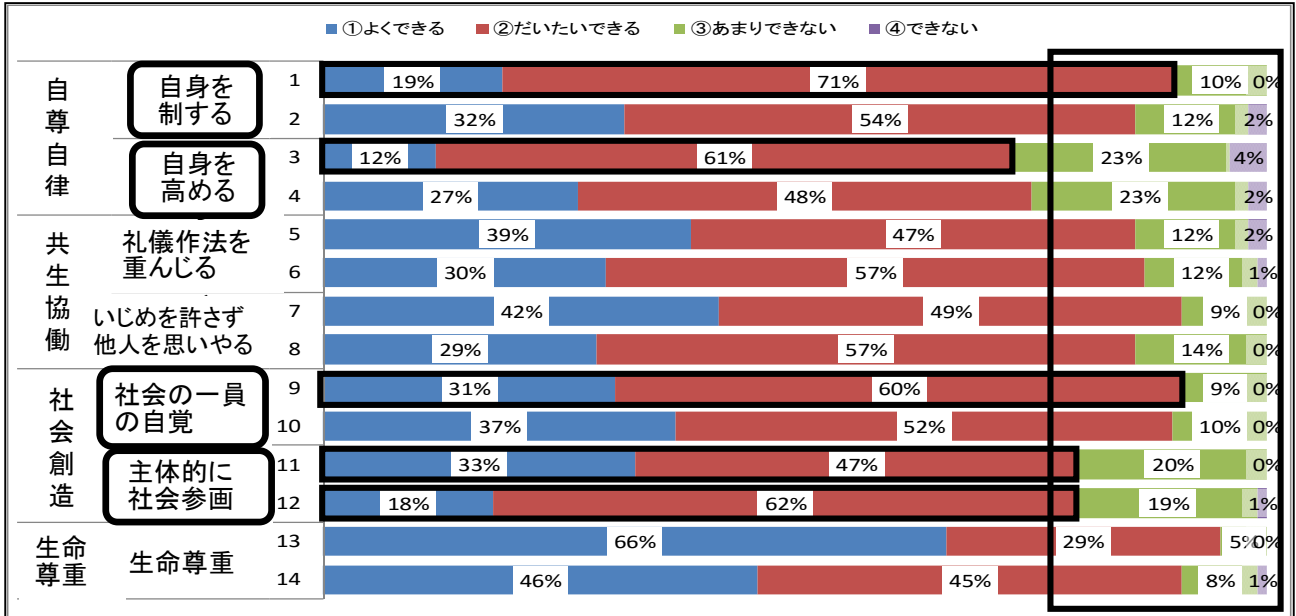
### 【第4学年】



《効果・成果》 ◇この学年は、第1学年から徳育科を学習してきた児童である。ほとんどの項目で、肯定的回答の割合が90%を超えている。 ◇「7. いじめを許さない」「9. ルール」⇒「いじめを許さない」は、95%の児童が肯定的に答えている（今年度＝昨年度91%＋4P）。「ルール」は、肯定的回答の割合が高い（今年度＝昨年度88%＋6P）。中学年で重点指導をしている「共生協働」に関する項目は、昨年度同様に高い数値であり、徳育科の授業の成果が現れている。相手や集団を尊重する意識が高まる時期であり、高学年に向けて継続して指導していく必要がある。

《課題・要指導》 ◆「3. 自分の良さ」「4. 努力」⇒視点「自尊自律」の項目で、肯定的回答の割合が、他の項目と比べて低い。特に、「3. 自分の良さ」が昨年度と比べても低くなっている（今年度＝昨年度91%－21P）。その中でも、「よくできる」と答えた児童は昨年度より増えた（今年度＝昨年度51%＋5P）。これは、学習に難しさを感じ自信をなくしたり、あるいは分かったときの達成感がより高くなったりしていることの現れと捉える。徳育科での学びが他教科・領域でも感じ取れるよう、指導内容を関連付ける工夫が必要である。

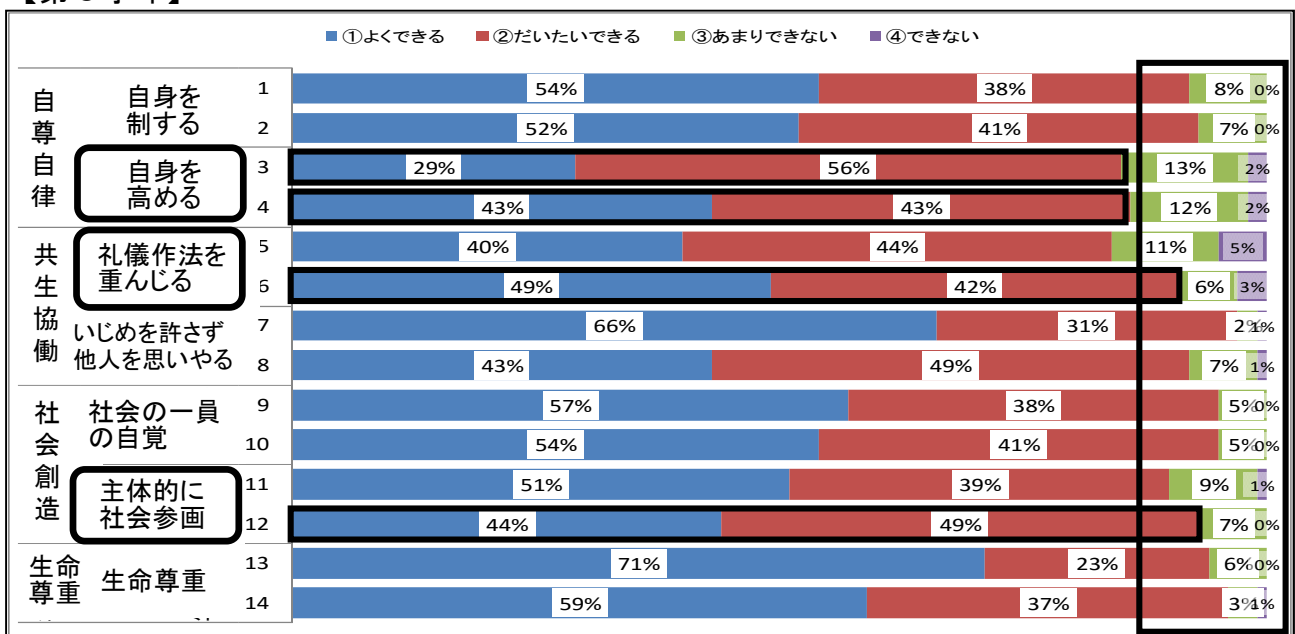
【第5学年】



《効果・成果》 ◇ほとんどの項目で、昨年度と比べて肯定的回答の割合が高くなった。  
 ◇「1. 挨拶」「4. 努力」⇒昨年度と比べて肯定的回答の割合が高い（挨拶…今年度＝昨年度80%＋10P 努力…今年度＝昨年度66%＋9P）。その中で、「よくできる」と答えた割合が「だいたいできる」と答えた割合に比べて低くなった。自分を振り返る眼が、より客観的になったことの現れと考える。 ◇「9. ルール」⇒昨年度より肯定的回答の割合が高い（今年度＝昨年度85%＋6P）。本研究における高学年の目指す児童像「社会創造」を重点化した指導の成果があった。

《課題・要指導》 ◆「3. 自分の良さ」⇒視点「自尊自律」の項目で、肯定的回答の割合が低い（今年度＝昨年度81%－6P）。他者と関わる中で、自分の短所を感じる場面が増えている結果とも考えられる。学校生活の中に自己肯定感が高められる活動を洗い出す。 ◆「11. 家庭生活」「12. 学校生活」⇒昨年度と比べて、肯定的回答の割合が低い（家庭生活…今年度＝昨年度85%－5P 学校生活…今年度＝昨年度88%－8P）。「主体的に社会に参画する態度」を重点化し、学校での役割を6年生から引き継ぐなどの機会を捉え、身に付けさせていく。

【第6学年】



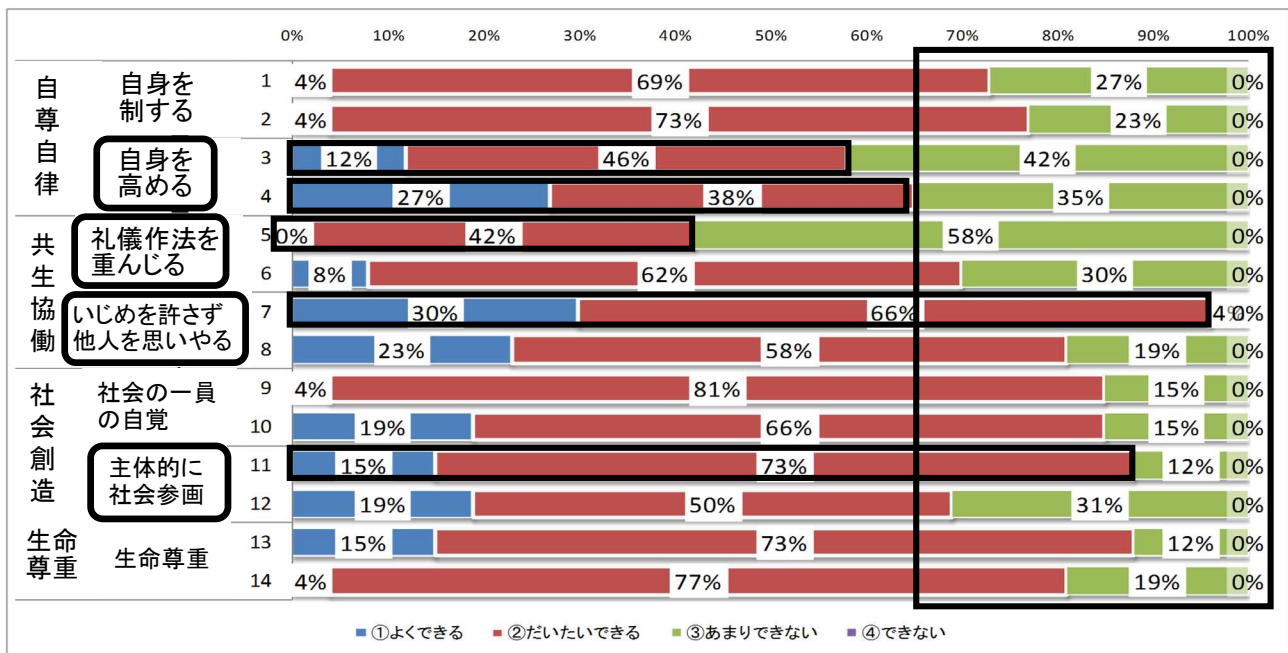
《効果・成果》 ◇全ての項目で、肯定的回答の割合が90%前後である。 ◇「6. 礼儀」「10. マナー」「12. 学校生活」⇒集団生活に関わる3項目で、昨年度と比べて肯定的回答の割合が高い（礼儀…今年度=昨年度88%+3P マナー…今年度=昨年度87%+8P 学校生活…今年度=昨年度89%+6P）。学校行事等で、最高学年として取り組む場が増えたことも要因の一つと考える。学校生活の中では、6年生としてどのように振る舞えばよいのかを考え、具体的に取り組んでいる姿が見られる。

《課題・要指導》 ◆「3. 自分の良さ」「4. 努力」⇒自尊自律の項目で、肯定的回答の割合が全ての項目と比べて比較的低い。自分自身を客観的に見て、自己評価が厳しいとも考えられる。一方、「3. 自分の良さ」「4. 努力」は、肯定的に答えた児童の割合は高くなった（自分の良さ…今年度=昨年度83%+2P 努力…今年度=昨年度77%+9P）。自分を肯定的に認めたいという気持ちは高くなっていると捉える。学校生活全体の中で、児童が互いに認め合ったり、教員を含む周囲の大人が児童一人一人の思いを受け入れたりする場を多く捉えることが必要である。

## 2 教員への効果

意識調査結果（平成29年9月実施、課題分析）

調査人数 26名



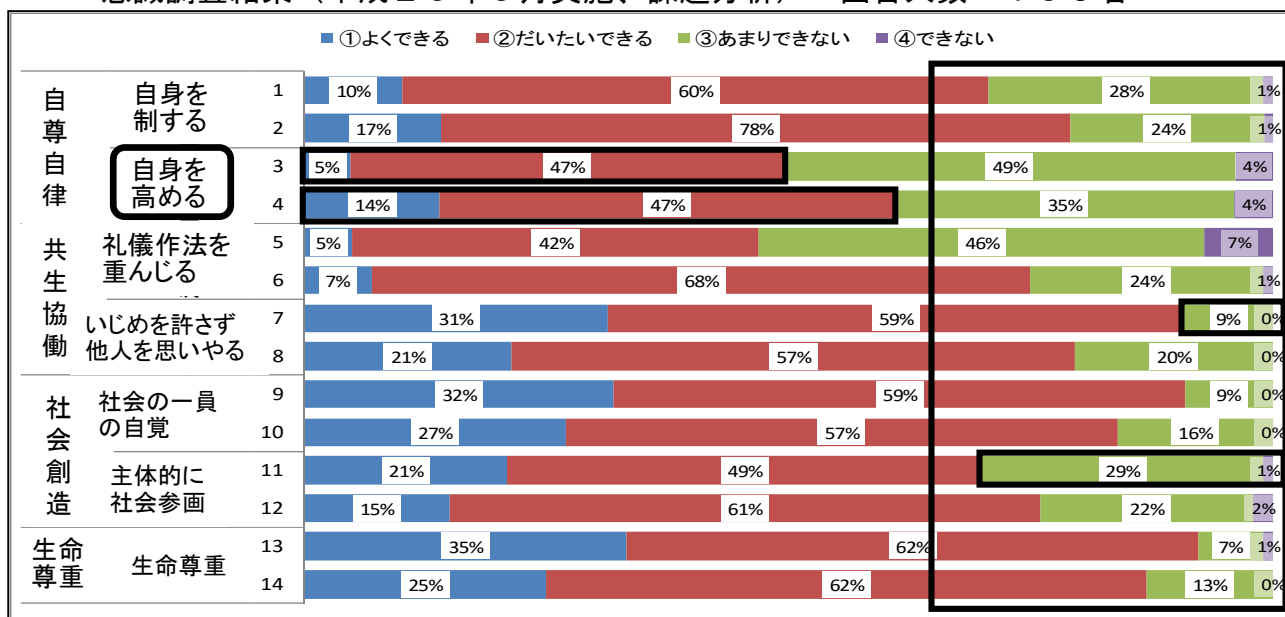
《効果・成果》 ◇客観的な児童の実態を見て、全体の70%が「よくできる」「だいたいできる」と判断している。どの項目も昨年度より数ポイント高くなった。著しく変容したのが「いじめを絶対に許さない」意識が、96%と高くなり、指導の成果が現れていると捉える。

《課題・要改善》 ◆昨年度までの課題が、4視点「自身を高めること」の「3. 自分の良さ」「4. 努力」の項目であったが、今年度も低い数値に留まっている。これは、児童と保護者も同様の認識である。同じ傾向を表しているのが「12. 学校生活」の項目である。これからの社会を生きていく資質・能力として、自分の特徴に気付き、短所は改め、長所を伸ばし、主体的に学級・学校・地域社会に働きかけることの指導を意図的に進めなければならない。 ◆「5. 敬語」の使い方は難しい。尊敬語、謙譲語と日本語ならではの難しさがある。相手を尊重する言葉が敬語であり、使わなければ身に付かないのが敬語である。国語科での指導計画を精査するとともに、礼儀の振舞や相手を思いやる気持ちの表現として、敬語を日常生活の中で意図的に指導していく必要がある。



### 3 保護者等への効果

意識調査結果（平成29年9月実施、課題分析） 回答人数 165名



《効果・成果》 ◇保護者として子供に期待するところが顕著に現れている。教員より見る目が全体的に厳しい。特に、「3. 自分の良さ」や「4. 努力」の項目は、保護者の期待が大きい。また、「11. 家庭生活」の項目で、児童の9割は「家族に感謝し、自分にできることは何かを考え、すすんで役に立つことができている。」と思っている。

《課題・要改善》 ◆3割の保護者は家族の一員としての自覚をもっと求めている。徳育科はもとより、全教育活動を通してそれぞれの目標や学習内容を徳育科と関連させていく必要がある。 ◆「9. いじめを許さない」の項目では、1割の保護者が何らかの不安を抱えていることが分かる。この1割を重く受け止め、学校・家庭・地域社会全体で、「いじめは悪だ」という意識をさらに強め、児童や家庭の不安に対して、より真摯に向き合っていかなければならない。

#### 《意識調査の自由記述より一部抜粋、またはその要旨》

- 学校公開中に、すすんで挨拶をしてくれた子がいました。とても気持ち良く、自分の子へもその話をしました。挨拶は心と心が通じ合う大切なことだと親としても伝えていきたいと思います。知っている子からも知らない子からも挨拶してくれます。
- 人や動物を大切にして、相手の立場になって考えることができていると思います。
- が手本となりマナーや思いやり、感謝の気持ちなど伝えていきたいと思います。
- すぐに「できない」「分からない」と投げ出してしまうので、あきらめない気持ちをもってもらいたいです。

### 4 運営指導委員会

#### (1) 組織

氏名	所属	職名	備考（専門分野等）
貝塚 茂樹	武蔵野大学	教授	教育課程 教育学 道徳
柳沼 良太	岐阜大学大学院	准教授	道徳 プラグマティズム
岩下 宣子	現代礼法研究所	代表	礼儀作法 マナー
栗原 和子	装道礼法きもの学院 三多摩認可連盟	元支部長	装道 着付け 地域住民

有馬 光彦	第八小学校学校運営協議会	会長	有識者 地域住民
佐藤 敏数	武蔵村山市教育委員会	学校教育担当部長	教育行政 社会
勝山 朗	武蔵村山市教育委員会	指導・教育センター 担当課長	教育行政 体育
牧 一彦	武蔵村山市立第八小学校	校長	算数 道徳
柴田 忠幸	武蔵村山市立第八小学校	副校長	算数
嶺井 勇哉	武蔵村山市立第八小学校	主幹教諭	研究主任 理科
小山 直之	武蔵村山市立第八小学校	主任教諭	研究副主任 道徳

## (2) 第三者からの効果

- 年3回運営指導委員会を行い、研究の進捗状況を伝えた上で、運営指導委員会に所属する方々から専門分野の視点で意見をいただき、研究に大きく活用することができた。
- 運営指導委員会を重ねるごとに、第三者である運営指導委員会の方々の研究への理解が深まってきた。と同時に、家庭生活中で生きるための研究の方向性が具体的に定まった。

## Ⅲ 実施上の問題点と今後の課題

### 1 「徳育科」の指導方法に関すること

- 「徳育科」の指導方法として、①問題解決的な学習 ②道徳的習慣・行為に関する指導体験的な学習 ③動作化 ④役割演技 ⑤コミュニケーションに関わる具体的な動作や所作の在り方に関する学習 等、多様な指導方法について、今後も更に検討していく必要がある。
- 「徳育科」の授業づくりのポイントとして、特に、①教師の発問の厳選（児童に問いをもたせる発問やねらいに即した発問等） ②話し合い活動の工夫（話し合いの焦点化 発達段階に即した場の設定等） を中心に更に研究していく必要がある。

### 2 「徳育科」の評価に関すること

- 「徳育科」の評価は、学力の三要素に照らし合わせて、1単位時間の授業を通して児童の変容や思考の深まり等を「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「知識・理解・技能」の3観点で評価していくことが可能である。そのために、具体的に評価の12視点を基にした所見の書き方も含めた評価の在り方、評価方法について更に検討していく必要がある。
- 日常の評価（総合所見等）との関わりや行動の記録（通知表や指導要録等）との関連をどのように明確にしていくか今後、更に検討していく必要がある。

### 3 「徳育科」と実生活との関連に関すること

- 「徳育科」の授業展開として、「展開1（教材を中心に考える）」と「展開2（生き方や実践につなげる）」を設定したことで、他教科や日常生活等との関連がより明確になり、道徳的実践につなげる上で効果的であった。今後も「徳育科で学習したこと」をどのように実生活につなげ、道徳的実践ができるようになるか」という視点で全教育活動との関連を明確にしていく必要がある。
- より実践に結び付けるためのカリキュラムマネジメントを図る必要がある。特に徳育科で培った道徳的実践意欲を具体的な実践と結びつけられるよう、まずは特別活動の年間計画の再構築を進めていく。